

5・トワちゃんと初めてのデート

数日後。トワとの約束の日。

主人公、仕事を終え、トワとの待ち合わせ場所へ向かっている。

しかし、主人公が到着すると、トワはなぜか待ち合わせ場所で、華やかな雰囲気、さらに容姿もいい男性達に囲まれている。

主人公、それを見て途端に気後れしてくる。

自分は、今こそ周囲が『ヒーロー』とはやし立ててくれるが、基本的にはさえない女性。美人な上頭も良い、将来有望なトワとは、一緒に歩いても釣り合わないのでは……。という、しゅんとした気分になってくる。

SE1：【264 まで流す】大学の環境音

SE2：【0ー7 秒ほどまで流して、立ち止まる】主人公の足音

トワと男性達が会話する声は遠い。あまり聞こえない。

※声が少し遠い

〈トワ〉

「うーん、行かないです♥

【迷惑している。一見いつもの明るいトーンだが、若干声が低い】
だからあ。行かないですってば。

【主人公に気づく。とたんにテンションが上がる】**※声が大きくなる**
あー！ 来てくれたんですねえ！

【小さめの声で男性達に向かって。一見いつもの明るいトーンだが、声が冷たい】
それじゃさようなら。また院で♥」

SE3：【38ー43 秒ほどまで流して、立ち止まる。本来の音源より早めに加工する】トワが主人公に駆け寄る音

SE4：【11ー15 秒ほどまで流して、立ち止まる。本来の音源よりも早めに加工する】主人公も、小走りでトワのところへ向かう音

主人公、つい数秒前まで不安でたまらなかったが、駆け寄ってくるトワがあまりにも嬉しそうなので、ホッとす。

主人公、トワが近づくと、ふんわりといい匂いがして、思わず胸がときめく。

主人公『トワちゃんいいにおいするなあ……。美人という生き物は、だいたいいいもい

におい……。さとりもそう……。』と内心うっとりしている。

一方、トワも『ああー♥ 今主人公のにおいがふわってしました！ このにおい、好き！』と思っている。

トワ、もはや主人公しか見えていない。

トワは主人公となると、普段の三倍は明るくキラキラニコニコしているのだが、主人公は案の定そのところがわかっていない。

『トワちゃんって元々明るくてニコニコしてて感じのいいタイプだし、いつもみんなにこんな感じなんだろうなあ。学生の頃同じクラスだったお姫様みたいな女の子も、分け隔てなく誰にでも感じが良かったし……。』などと、見当違いのことを考えている。

トワは実際母星では本物のお姫様だったが、その性格は『誰に対しても分け隔てなく、いつも明るくニコニコしている、お姫様みたいな女の子』には程遠い。ただの性悪宇宙人である。

〈主人公〉

「トワちゃんこんばんは！ ごめんね、お待たせしちゃって」

〈トワ〉

「こんばんはあー！ ううん♥ ぜんぜん待ってないです♥

それよりごめんなさい。今日はわざわざ大学院まで来ていただいて」

トワが所属する大学は地域で一番の難関大で、さとの母校でもある。さらに言えば、さとの一族が創設にかかわっている大学である。

その正体はアメリカのとある大学と密接につながり、なぜかこの街に集まりやすい『人間でないもの』を積極的に受け入れ、学ばせている場所。

母体はアメリカにあるので、トワは十三年前、まずはさとの手引きでアメリカに向かい、大学卒業まで向こうで学んだ後、実質の姉妹校であるここへやってきたのである。

つまり、トワの通う大学はさとのテリトリーであり、さとの要望であればおおむね通る。そのため、トワは奇妙な時期に今の大学院へ来られたのである。

なお、さとりは現在、二つの大学を行き来しながら『人間でないもの』達が人間社会で暮らすためのサポートする仕事をしている。

しかし、主人公にはその詳細を伝えていないため、主人公はさとのことを『外資系のすごい仕事をしているOL』だと思い込んでいる。

ちなみに、主人公はこの大学をさとりと一緒に受験したが落ちたので、その点でもこの学校と、この学校の学生にコンプレックスが少しある。

〈主人公〉

「いいのいいの。トワちゃんの大学、一度来てみたかったし。
あの……さっきの人達は……お友達？」

トワ『やはり聞いてきました』と思っている。

トワは宇宙人なので、正直なところ地球人の美醜はよくわからない。
だからまるでこだわりもないし、そもそも主人公に『一生ラブ♥』なので、主人公以外の
地球人を恋愛対象と捉えることもない。

だが、地球人の方はそうは思わない。というかまず、トワの正体を知らない。
なので、トワは周囲から何かにつけ恋愛の話をされる。それだけならまだ仕方ないのだが、
周囲はトワのことを異性愛者と仮定して『男性の恋人を作らないのか』と聞いて来るので、
トワは内心辟易しているのである。

トワ、自分の片想い相手はもはや同種ですらないので『トワはー。すでに異性愛者でも同
性愛者でもなく、言うならば異種愛者なんですよー？ あーでもこれ揚げ足取りっていう
か、ダジャレみたいなものですよねー？ ……絶対言うのはやめときましょー』と思っ
ている。

〈トワ〉

「【主人公に少しでも誤解されたくないの、きっぱりと】
いいえ？ ただの院の知り合いです。

あの人達、今日食事会があるみたいで。来ないかってちょっとしつこくつてえ」

〈主人公〉

「行かなくてよかったの？ 学校の用事なのに……」

〈トワ〉

「【主人公がなぜそんなことを言い出すのか理解できない】
ううん？ 行かないですよ？ なぜ？」

しかし主人公は当然トワの指向も知らなければ、そもそも好かれていることにも気づい
ていない。さらに、自分が落ちた大学に通う華やかな男性達にモテモテなトワを見て、じわ
じわと『やっぱり場違いだったのでは……』『トワちゃんは、ああいう人達にこそこの街を
案内してもらわなきゃなのでは……』と思い始めている。

主人公は心優しく誠実だが、いかんせん卑屈で自分に自信がない。

『いい年して卑屈すぎるのはみっともない』と、主人公自身も改めようとしているのだが、
たとえば『自分に自信を持って、今日からは頑張ります♥』など宣言して、すぐに自分に自
信を持てるのならば、誰も苦勞はしないのだった。

〈主人公〉

「だってトワちゃん、まだこっちにきたばかりで、知り合いとか少ないんだよね？
せっかく交流会があるなら、行かないともったいないんじゃない？
わたしとだったら、いつでもお出かけできるし……。
あと皆さん、なんだかすごく格好いい感じの人だったよ？」

そしてトワも、そんな主人公の性格を理解している。

だが、主人公のようなタイプの人間に『お前は自己評価が低い。もっと自分に自信を持つべきだ』などと指摘したところで、ピンと来るはずもないこともわかっている。

なぜならば、トワも本来は同じタイプの宇宙人だからである。

トワは母星ではみんな同じ種なので、生来の気の強さでブイブイ言わせられたし、今も美女に擬態しているのも、表面上は堂々とできる。

しかし、今のトワの見た目は、いわばゲームのアバターのようなもの。

地球で生きると決めた際に、さとりで紹介された、とある施設の技術さえあれば、誰でも人外から美形の人間に変身することができる。なので『ならば美女に』と、今の姿を選んだだけなのである。

なのでトワ『美女アバター』でモテてもしょうがない。それから、アバターが美しいからといって自分が美しい地球人だと思ひ込むのは、あまりにもバカすぎる。自分の正体はグロテスクな宇宙人なのだから、容姿を誉められても勘違いしてはいけないし、モテて調子に乗るのは愚の骨頂である』と思っている。

同時に『見た目でちやほやされても、本当の姿を見たら、人間の皆さんはきつと逃げてくでしようし……』とどうしても自信が持てない面があるのだった。

ちなみにさとりも同じ意見である。

だから二人は『どうせなら美形のアバターにしよう』とその場の勢いで自分の容姿をよくし過ぎたことを後悔している。なので、誇示しないのだった。

しかしそんな姿は、主人公には『本物の美人は、謙虚で心もきれいなんだ……！』と思われてしまう。

結果、大きなすれ違いが生じているのだった。

〈トワ〉

「【心底理解できないが、冷たく聞こえないように気を付ける】

あははー。なるほど♥

【本当は『全く興味ない』なのだが、それだと感じが悪いのでマイルドな表現をする】
でも。イケメンとかお金持ちとか。トワあんまり興味ないです。

【さりと。実際は自分に言い聞かせるように】

今は、誰かとお付き合いするとか。考えてないので♥

【さりげなく主人公の手を取る。『新しくお友達になってくれた方』とはもちろん主人公のこと】

だから！ 新しくお友達になってくれた方が。今は一番。大切です♥

『わたしとだったら他の日でもいいから』なんて言わないで下さい。

トワ、今日をすごく楽しみにしてたんです。

今日はよろしくお願いしますね♥」

〈主人公〉

「そっか。なら、良かった。わたしこそ今日はよろしくね！」

主人公、トワの言葉にホッとした表情になる。

トワ、それを見て『主人公可愛いです……。地球の美醜とか、いまだにまるでピンときませんけどお……この人は絶対可愛いです！ はぁなんか緊張してきました』と、きゅんとなる。

〈トワ〉

「ぼろつと本音が漏れる」

はぁ。でもなんだか緊張します。

【恥ずかしそうに。勇気を出してドキドキしながら言う】

※お世辞つぽく聞こえないように注意して下さい

その。アナタって、すごく可愛い方なので。

一緒に歩けるの、嬉しいですけど。ワタシの格好これで大丈夫か、なんだか不安です！」

〈主人公〉

「えい」

〈トワ〉

【主人公が驚くので驚いている】

「えい」

トワ、わかっていても驚く。主人公のリアクションは想像できたが、自分としては勇気を出して言ったので、こうもあからさまに『そんなバカな』という反応をされては、なんだか自分の想いが拒絶されたようで、悲しくなってしまう。

〈主人公〉

「え？」

〈トワ〉

「【内心】もう一回やるんです！』 と思っている！』
え？」

〈主人公〉

「なんでそうなの？ 逆だよね？」

〈トワ〉

「【困惑して。明るくコミカルなノリだが、少し悲しそうに】
なぜ逆でしょと言われますー？」

〈主人公〉

「だ、だって……。かわいいのはトワちゃんでしょう。
かわいいだけじゃなくて綺麗だし、頭もいいし……。
わたしなんて、どこにでもいる普通……いやあ、普通以下くらいの人だよ！
ああ、そんな風に言われること全然ないから、いやー、びっくりしちゃった！
でもありがとう！ ありがとうね！」

主人公、卑屈になるのはいけないと思いつつ、軌道修正の仕方がわからない。

主人公としては、自分のことを美形だとか、可愛いだとかはとも思えないのだが、せめてそう言ってくれたトワに、お礼は言いたいと感じる。

そのため何とか明るい方向に戻すが、トワにはそれが痛々しく感じられる。

トワ、何とか主人公に自分の想いを伝えようと慌てて話すあまり、ますます一人称がごっちゃになる。

トワは主人公の前では知的な女性だと思われたので、一人称『ワタシ』で通したいのだが、気を抜くどうしても素の一人称『トワ』が出てしまうのである。

なぜならトワの名前は主人公が付けたので、トワはそれを自慢したい。特に主人公と一緒にいられなくなっただけなら『トワの名前、トワっていうんですよ！ 主人公がつけてくれたんですよ！』と少しでも主張したいと思った結果、こうなってしまった。しかも、十三年たった今も直っていない。アメリカにいたときは英語で話していたので直す機会もなかった。

ちなみにさとりは『その年で一人称が自分の名前とか……。意図するところはまあわかるけど。それ、貴方が外国人みたいなものだと思われるから許されているだけだって……。忘れない方がいいわよ？』と冷たい。さとりはトワに対して、基本的に辛辣である。

〈トワ〉

「やや不満げに」

そんなことありません！

【言うと緊張する】

アナタはとっても素敵♥ です♥

【少し早口でからかうように】

まあ、ちよつと鍵なくしたり、おまぬけさんなどところもありますけど。
すごく可愛い人です。

【実際はそれが理由ではないのだが、主人公を勇気づけたいのでつじつまを合わせて話す】

だからワタシ、アナタに出会ってすぐお友達になりたいなあ♥ って思ったんですよ？
それにい。アナタのことをよく知らない人だって！
アナタのとっても勇敢で優しいところを知れば。
きっと大好きになっちゃいますよっ♥」

トワ『ていうか、それが理由で、少なくとも二名の女性っていうか人間じゃないものにモテてますし。ああ、今、間接的にだけ大好きって言っちゃいましたく！』と思っている。
しかし主人公、なおもトワの意図を理解していない。それどころか火災の話題になったことで、さとりにつき、トワにも真相をわかってもらおうとし始めてしまう。

〈主人公〉

「あつ……ありがとうございます！

……でもあれは、他に助けてくれた人がいたからなんだ。

誰もその人を見てないから、みんな夢だって言うんだけど……。

火災の日、今にも倒れそうになってたわたしと大家さんを助けてくれた人がいたの。
だからわたしはヒーローっていうか、どちらかというとなり損ねた人なんだよね。
気持ちは嬉しいけど、ちよつと恐縮しちゃうなあ……」

〈トワ〉

「火事の日、他に助けてくれた人が？

【不自然にきつぱりと】

そうだとっても。

【不自然に別の方向に話を持って行こうとするが、結果的にまるであの場にいたかのよう
な発言をしてしまう】

あれはアナタのお手柄です！

【自分のミスに気づいていない。明るく励ます】

だって最初に建物に戻って、大家さんを見つけたのはアナタなんですから♥

自信持って下さいね♥

それじゃ行きましょっか！ ご案内。お願いします♥」

〈主人公〉

「そうだね。ごめんね、なんだかさつきから気を遣わせちゃって！
お詫びに、今日は完璧にエスコートするから！」

SE5…【2音源とも、0―5秒ほどを一緒に流す】二人が歩き出す音

一度フェードアウトする。

SE6…【0―5秒ほど流して、それから342まで小さく流れ続ける】街中の環境音

数十分後。

主人公とトワ、雑貨屋に来ている。

トワ、店があまりにも自分好みなので、驚いている。

〈トワ〉

「素が出るほど感激している」

すっ……っい！ こ！ こんなお店、あるんですねえ！」

〈主人公〉

「良かったあ。気に入ってもらえた？」

主人公、トワがとても喜んでいたので、嬉しい。

主人公、今回トワを案内するにあたり、先日トワの部屋を訪問した日のことを参考にしていた。あのとき見たトワの持ち物などを思い出して、今日はトワが好みそうな場所を中心に回れるようコースを考えたのである。

〈トワ〉

「素が出るほど感激している」

はい！ すっっい！ すっっい、好きです。こういうお店。

新しいお部屋。こ！ こういうインテリアにしたいなあって思ってた……。

【最初は『どうしてわかったんです？』と語っていたが、話している途中で察する】

なっ。なんで……あっ!」

〈主人公〉

「うん。この前トワちゃんのおうちにお邪魔させていただいた時のこと思い出して。トワちゃんこういうの好きかな?　と行って、ここにしたんだ。まだ家具とか足りないものあるんだよね?　よかったら、ここで探そうよ」

トワ、主人公はさらりと言っているが、探すのには相当の苦労があったろうと感じる。その気持ちがたまらなく嬉しいし『こんなのもつと好きになっちゃいます〜!』と思っている。

トワ、主人公はあくまで自分のことを大したことはない人間だと言い張るが、実際はこんなに他人をきちんとよく見ていて、それを生かした細やか、かつぴったりの気遣いをしてくれる人はなかなかいないだろうと感じる。

主人公のはからいが嬉しくて、顔が真っ赤になる。

〈トワ〉

「トワのおうち見て。トワの好きそうなお店、探してくれたんですね?

【嬉しさのあまり、顔が真っ赤になる】

嬉しいです……。すごく細かいところまで、見てて、くださるんですね……」

〈主人公〉

「喜んでもらえてよかったあ。他にも何軒かピックアップしておいたからね。時間の許す限り、一緒に回ろうよ」

〈トワ〉

「えほ!　他にも候補をほ　そっちも早く行きたいですう!

【『あでも』は『あ、でも』だが、感激するあまり早口になり、くっついてしまう】

あでも!　ここもゆっくり見たい、です。

すごい。嬉しい、です……。

【聞こえないほど小声で】

やっぱりアナタ、素敵です。何も変わってない……」

〈主人公〉

「うん?」

〈トワ〉

「泣きそうなほど嬉しい」

いいえ♥ 何でも♥

SE7…【1―2秒の1回分の『カシヤン』という音のみ流す】カシヤンという、店内の商品を手取る音

トワ、嬉しくなり、今日は目いっぱい買い物を楽しもうと感じる。

〈トワ〉

「真剣な面持ちで」

ところであのお♥

こっちのマグとこっちのマグだったらあ。アナタはどっちがいいと思います？」

一度フェードアウトする。

深夜。終電後。

主人公とトワ、マンションまで戻ってきた。

主人公とトワ、あれから終電ギリギリまで盛り上がり、楽しく買い物をした。

主人公はあの後もトワの好きそうな場所へたくさん連れて行き、トワの胸の高鳴りは最高潮。

トワ、主人公は自分よりも年上だが、自分よりも背が低いし、服装も化粧もシンプルで、高価そうなものも持っていない。そのためこれまでは、正直なところ自分達を、同世代のようを感じているところもあった。

だが今日一緒に過ごした結果、『年齢』という点において、二人の違いは何気ない部分に強く出ていたとトワは感じる。

今日は案内という名目だったとはいえ、主人公は、行き先をすべてトワの好みに合わせてくれた。トワが少し疲れてくる直前に休めそうな店へさりげなく連れて行ってくれるし、雑談をしている時も、本人は自分をつまらないと言い張るが、話題が豊富で話していて楽しいし、聞くのもうまい。

何より無理に自分をよく見せようとせず、ナチュラルなところが良い。自分に自信がないというのが、良い方向にも作用した結果であるとトワは考える。

トワ、主人公は、やはり余裕ある、年上の女性なのだと感じる。

トワ、胸のときめきが止まらず、ずっとドキドキしている。

もっと一緒にいたいのに、もう家についてしまうことがもどかしい。

そうしているうちに二人、部屋の前までたどり着いてしまう。

あとはお互いの家に入るだけという状況。

SE8…【0―3秒ほど流して、その後小さくなり、トラック終わりまで流れ続ける】マン

ションの環境音

SE9…【SE5と同様に、2音源とも、0―5秒ほどを一緒に流す】マンションの廊下を

二人が歩く音

※二人とも部屋の入口まで来ている。立ち止まって会話開始

〈トワ〉

「はああ！　たくさんお買い物しちゃいましたねえ！

終電ギリギリになっちゃいましたあ。

あのっ。今日はありがとうございました。とっても楽しかったです♥」

〈主人公〉

「とんでもない！　わたしもすごく楽しかった。

短い時間だったけど、この前のお礼ができたなら嬉しいよ。

こんなに笑ったの、久しぶり。もう解散なのが淋しいくらい」

〈トワ〉

「【残念そうに】

はい。本当にあつという間でした。

また♥　遊びに行きましょね！

【ドキドキと切り出す】

あの。今日、トワの好きそうなところだけじゃなくて……。

疲れたりしないようにルート決めてくれたり。

他にも色々。たくさん考えて計画してくれてたんですね？」

〈主人公〉

「あ……」

主人公、その通りなのだが、認めるのはなんだかスマートではないような気がする。ただど本当は、気づいてくれたことが嬉しい。なんだかとても報われた気分になる。

なんと返せばいいか戸惑っていると、トワが微笑む。

〈トワ〉

「気づいてましたよ♥ ありがとうございます。すごく嬉しかったです♥
な♥ の♥ でっ!」

トワ、主人公に向かって、小さな包みを差し出す。

SE10

【0―5秒ほどまで】プレゼントの包みを渡す、カサ、という音

〈トワ〉

「プレゼントですつ。今日のお礼♥
このアクセサリー。さっきのお店で見ませんでした？」

〈主人公〉

「……!」

主人公、トワから差し出されたものに驚く。

それは、最初の店でこっそり見ていたアクセサリーだったからである。
買おうか悩んでいたのだが、自分には可愛らしすぎる、年齢的にも合わないかも……。と
思い、結局やめたのである。

主人公、トワは自分のことを『トワのことをよく見ていてくれる』と言っていたが、それはトワも同じではないかと思う。こんなことをされたのは初めてで、どんどん胸がドキドキしてくる。

〈主人公〉

「……見てた。ありがとう。すごく嬉しい……。もらって、いいの？」

主人公『すごく気に入って、欲しいなって思った。でも、似合わないかもと思って買えなかったの』という言葉を飲み込む。

トワは似合うと思って買ってくれたのだと、わかっていたからである。

主人公、自分に自信が持てないのには変わりないが、せめてトワの気持ちを無碍にするようなことは言いたくないと思う。

〈トワ〉

「もちろんです♥ 受け取って下さい。

ふふ。つけてみてくださいか？」

主人公が真っ赤になって顔を上げると、トワの優しい表情がある。

主人公、頷くと、おそろおそろ自分でアクセサリーをつけて、見せる。

〈主人公〉

「……どうかな……」

〈トワ〉

「うん♡ 似合ってます。」

【心から。思わず本音が漏れる】

※女性目線で見えて憧れるおしやれな美人に、こういうこと言われたら嬉しいなあ、という感じの言い方をお願いします。

すごく可愛い」

主人公、顔を赤くして恥ずかしそうにしている。

トワ、それを見ていると、思わずキスしたくなってしまふ。

なので、そうなる前に退散しようとその場を離れる。

〈トワ〉

「じゃあまた！ おやすみなさい♡」

トワ、言うと、照れた様子で去って行く。

SE 1 1

…トワが自宅の扉を開錠する音

SE 1 2

【0―3秒ほどまで流す】トワが自宅の扉を開ける音

主人公、しばらく動けず、そのまま見送る形になる。

しばらく環境音のみで、やがてフェードアウトする。

